

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520194

研究課題名(和文) 室町期における修験道の儀礼再興と文化興隆に関する総合的研究

研究課題名(英文) The Research on the Religious Ceremonies and the Culture of the Shugendo in Muromachi period

研究代表者

川崎 剛志(KAWASAKI TSUYOSHI)

就実大学・人文科学部・教授

研究者番号：70281524

研究成果の概要(和文): 修験道は、本来、自然崇拜の様態だが、日本では院政期以降、霊山に秘められた力を自派に取り込むことが、政権や寺院の存立のための一要件とされた。本研究では、南北朝期の戦乱後、室町幕府や戦国大名の支えにより諸国の霊山が再び興隆されたとき、霊山と都市との間で、信仰面はもとより文化面においても、双方向的な影響が生じた事実を調査・検証した上で、学際的(宗教・歴史・文学・芸能・美術)に議論し、解明した。

研究成果の概要(英文): Shugendo is a kind of nature worship. Since the Insei period, the power of sacred mountains has been considered important by political regimes and large temples. We researched the mutual influences during the Muromachi period interdisciplinarily, and elucidated the religious and cultural interaction between sacred mountains and cities.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：修験道、熊野、聖護院、縁起絵巻、平家物語

1. 研究開始当初の背景

(1) 修験道及びその文化の研究は、主に宗

| 教学・歴史学・美術史学の研究者により推進されてきた。それらの成果を踏まえて、川崎

は、数年来、修験道の儀礼とそれを支える縁起（始原と歴史、霊験）が次々と創出され、更新されていく事象を、時間軸・空間軸にそって解明してきた。

(2) その過程で、室町期の大規模な修験道再興事業が、将軍・大名等、時々為政者の支えを得て推進されたこと、そして、最先端の都市の文化・芸能・工芸等と相互に広くかつ深く関わり、影響し合っていたことに気づいた。

(3) 2005年度以降、和歌山県立博物館で開催された特別展「熊野速玉大社の名宝」(2005)「熊野・那智山の歴史と文化」(2006)「熊野本宮大社と熊野古道」(2007)は、新資料の発掘や卓見に富む充実した内容であり、室町期の熊野信仰に関しても、新たな情報や知見がふんだんに盛り込まれていた。その成果を正確に受けとめ、広く告知し、学際的に議論、評価することにより、修験道文化の都市性という、魅力的で、新たな研究の視界が開けると確信した。

2. 研究の目的

(1) 室町前期、室町幕府の支援を受けて、聖護院門跡＝熊野三山検校（摂家子息）を頂点とする新たな修験道組織の下で、熊野三山や大峯などの霊山が興隆され、修行儀礼や参詣儀礼が再興されるとともに、霊山と儀礼の聖性を支える縁起（始原と歴史、霊験）や曼荼羅が次々と創出され、更新された。それらの事象を、時間軸と空間軸にそって整理することにより、霊山の信仰組織と京の修験寺院において、共通して、あるいは各々独自に、聖なる山の秘密が創造され続けた跡を検証する。

(2) 室町幕府や諸大名の霊山に対する篤い信仰は、霊山という場のみで完結したわけではなく、京や地方都市にも浸透し、都市の人々の信仰や文化の形成にも多大な影響を与えた。縁起絵巻の制作と享受、能や幸若舞の創作と享受、平家物語の異本生成と享受を中心に取り上げ、それらの営為の実態を検証し、文化的達成を評価する。

3. 研究の方法

(1) 本課題について、修験道儀礼再興の研究と修験道文化興隆の研究に大別して、各々に研究を進めた上で、それらの成果を統合し、室町期における「儀礼再興」と「文化興隆」を一連の事象として評価する。

(2) 修験道儀礼再興の研究は、さらに、聖護院門跡の研究（川崎・小川）、修験道文献の研究（川崎）、文化財の研究（大河内）

に細分して、精緻な分析を行う。

修験道文化興隆の研究は、さらに絵巻制作の研究（川崎）、能・幸若舞の研究（川崎）、平家物語の研究（源）に細分して、精緻な分析を行う。またこれらに關与した公家・武家の研究（小川）も行う。

(3) 室町期のなかでも、第三代室町将軍足利義満、第四代足利義持の時代に特に注目する。当時の聖護院門跡は、関白二条良基の子息の良意、そして同母弟の満意であり、聖護院門跡による熊野三山検校職の重代職化は、このときに始まったとされる。その新体制の下で、京において、また熊野三山において、何が起きたのかを整理し、評価する。

(4) 応仁の乱以降については、関白近衛房嗣の子息の道興以後、聖護院門跡による諸国の天台宗寺門派修験寺院の統括が進展する。同時に、諸大名による領国内の霊山への信仰も篤くなり、諸国の霊山の儀礼と縁起の整備が急速に進められた。それらの事象を見渡し、評価する。

(5) 2008年度末に研究集会を開催する。各分野の最先端の研究者の報告に基づいて学際的な議論を行い、本研究課題に関する問題の所在を鮮明にすると同時に、今後の議論の礎とする。その成果、及びそこで明らかになった課題を踏まえて、個別研究と総合研究を進め、2010年度末か、それに近い時期に、学術論文集を編集・刊行して、本研究を締めくくる。

これと並行して、国外の研究集会に積極的に参加して、修験道研究に関する情報と議論の共有化を図る。

また国内では、一般の聴衆を対象とした講演を行い、研究成果の社会への還元にも努める。

4. 研究成果

(1) 本研究課題と同名の研究集会（資料展覧・シンポジウム・報告）を開催した（2008/12/19 - 21、於名古屋大学、名古屋大学大学院比較人文学講座阿部泰郎研究室との共催）。文学・芸能史・美術史・宗教学・歴史学等、多分野の研究者の参加を得て、多様な視点から報告がなされ、学際的な議論が交わされた。

その結果、応仁の乱の前と後とで、霊山の信仰のあり方が大きく変化したことが再確認された。また、修験道組織の活動の解明と並行して、応仁の乱前については歴代将軍の信仰の実態、応仁の乱後については諸国大名の信仰を、周到に跡付けていくことの重要性も明らかになった。

(2) 川崎が、米国で開催された国際研究集会に参加し、研究発表を行った。熊野宮曼荼羅に関する研究発表(2009、フリーア美術館)、熊野信仰の史的展開と縁起に関する研究発表(2010、イリノイ大学)。

いずれも、主に熊野信仰の宗教図像を取りあげて、その魅力を紹介し、その価値を論じた。国外の研究者も多く関心を寄せる対象であったため、たんなる紹介に終わらず、本質的な議論を交わすことができた。

なおの直前には、フリーア美術館のご厚意により、室町前期作の熊野宮曼荼羅三軸を熟覧・調査した。

(3) 川崎が、和歌山県立博物館の特別展で、一般聴衆を対象に、熊野信仰の図像表現に関する講演を行った(2009)。熊野三山の座す地元県民に対して、微力ながら研究成果を還元した。

同じく川崎が、国際熊野学会大会で、研究者・一般聴衆を対象に、室町時代の京と熊野三山における縁起の類聚と撰述に関する講演を行った(2010)。聴衆のなかには、修行を重ねた山伏の方々も含まれており、彼らから感想や意見を聴くことができた。

(4) 本研究課題に関する学術論文集『修験道の室町文化』(2010/6、岩田書院)を編集、刊行した。川崎剛志(研究代表者)編。最先端の研究論文、全10点を収める。著者は、川崎剛志(文学、2点)、安永拓世(美術史)、恋田知子(文学)、天野文雄(芸能史)、源健一郎(研究分担者、文学)、大河内智之(研究協力者、美術史)、高岸輝(美術史)、阿部美香(文学)、阿部泰郎(文学)である。

上記論文の大半は、修験道儀礼再興と修験道文化興隆の両者に関わる内容だが、どちらかといえば、川崎b・安永・恋田・大河内の論文は前者に属し、天野・源・高岸・阿部美香の論文は後者に属する。また川崎a論文は室町前期の修験道文化に関する総論、阿部泰郎論文はそれ以前の修験道文化に関する総論となっている。

時期的にみると、応仁の乱前に関する論文が多いが、応仁の乱後についても、高岸論文が細川氏の領国における「槻峯寺建立修行縁起絵巻」制作について、阿部美香論文が後北条氏の領国における「箱根権現縁起絵巻」制作について論じており、今後の議論の礎をなす。

上記のうち、安永(和歌山県立博物館学芸員)と大河内(同左)は、それぞれ和歌山県立博物館で開催された特別展「熊野速玉大社の名宝」(2005)、「熊野三山の至宝」(2009)の担当者であり、そのときの成果を踏まえ、発展されるかたちで、両者の論文は執筆されている。特別展の拝観者に限定して提供され

ていた重要な情報と知見を、諸分野の研究者に対して広く提供できたのも、本研究の成果だと考える。

なお、本書では、室町文化の形と色を読者に伝えるべく、図版の充実を図った。特にフリーア美術館からは特別な配慮を賜って、「熊野宮曼荼羅」「槻峯寺建立修行縁起絵巻」の鮮明な図版(カラー・モノクロ)を数多く掲載できた。

(5) 応仁の乱直前に道興が聖護院門跡となつて以降の事象については、十分に検討できず、今後の課題とせざるをえなかった。

とりわけ、室町時代から江戸時代前期にかけて広く流布し、多彩な異本を生んだ「熊野権現縁起」の成立と流布について、新たな見解を示せなかったのは、残念であった。

その一方で、知見院猷助撰『両峯問答秘抄(仮題)』に注目して、基礎的研究を発表したのは、一つの成果と認められるであろう。すなわち、撰者である猷助の師弟関係及び修験道書・文書の書写活動を確認した上で、聖護院門跡(=熊野三山検校)若王子乗々院(=熊野三山奉行)という天台宗門派修験組織の中核、あるいはそれにごく近い場で、両修験寺院の蔵書に拠りながら同書が撰述されたと、推定した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

川崎剛志、智証大師の熊野参詣、巡礼記研究、査読有、第六集、2009、23-32
源健一郎、「一念弥陀仏」偈の受容層

『平家物語』が語る 法然による重衡救済物語 の位相を考えるために、中世の軍記物語と歴史叙述、査読無、2011、320-352

川崎剛志、『両峯問答秘抄』の撰述に関する推論、熊野学研究、査読有、第二巻、2011(予定)

〔学会発表〕(計5件)

川崎剛志、フリーア美術館所蔵「熊野宮曼荼羅」の図像表現 室町期の参詣儀礼と地理感覚に照らして、奈良絵本・絵巻国際会議ワシントン大会、2009/3/27、フリーア美術館(アメリカ。ワシントンD.C.)

川崎剛志、《講演》熊野参詣路の図像表現、和歌山県博物館特別展「熊野三山の至宝 - 熊野信仰の祈りのかたち -」、2009/10/10、和歌山県立博物館

川崎剛志、熊野信仰の形成と展開 『神道集』とその周辺 -、国際研究集会

「Rethinking the Boundaries Between Religion and Culture in Premodern Japan: Religious Practitioners, Aristocrats, and the Transformation of Japanese Literatures」, 2010/3/19、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校（アメリカ、イリノイ州）
川崎剛志、《講演》熊野縁起の類聚と再編 『両峯問答秘抄』を中心に、2010年度国際熊野学会大会、2010/5/22、聖護院門跡

〔図書〕(計2件)

- 国文学研究資料館編、臨川書店、真福善本叢刊第二期・中世唱導資料集二、2008、270-284・341-354
川崎剛志編、岩田書院、修験道の室町文化、2011、250（予定）
（川崎剛志、室町前期における熊野三山再興と文化興隆、7-20）
（川崎剛志、熊野参詣儀礼の図像化 フリーア美術館蔵「熊野宮曼荼羅」をめぐって、95-118）
（源健一郎、『平家物語』の諸本展開と寺門派修験 平家享受の場との交渉を視野に入れつつ、119-150）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川崎 剛志 (KAWASAKI TSUYOSHI)
就実大学・人文科学部・教授
研究者番号：70281524

(2) 研究分担者

源 健一郎 (MINAMOTO KENICHIRO)
四天王寺大学・人文社会学部・教授
研究者番号：00288953

(3) 連携研究者

小川 剛生 (OGAWA TAKEO)
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号：30295117

(4) 研究協力者

大河内 智之 (OOKOUCHI TOMOYUKI)
和歌山県立博物館・学芸員